

令和七年度第57回 全国大会記録

伊藤一重 山本美紀

第57回解釈学会全国大会が、二〇二五年八月二三日（土）・二四日（日）の二日間にわたり、大阪商業大学で開催されました。全国から約50名が集まり、研究発表や講演、総会、実地踏査を通して、学びと交流の時間を持つことができました。



研究発表

初日は、研究発表と講演が行われました。

発表は日本文学・日本語学を扱う第一会場と、国語教育を中心とした第二会場に分かれて進められました。多くの方が登壇し、それぞれに特色ある発表が続きました。若手研究者の発表にはみずみずしい感性があふれ、会場から「がんばれ！」と声をかけたくなるような熱意が感じられました。一方、長く研究を続けていらっしゃる方々の発表は、日々の



研究発表

実践や長年の蓄積に裏打ちされたもので、具体的でありながら新しい視点も多く、心躍るような内容ばかりでした。

午後には、司馬遼太郎記念館館長である上村洋行氏による公開講演が行われました。司馬文学を育んだ三つの経験——旧制中学時代、軍隊経験、新聞記者時代——について語られ、司馬の創作の原点に触れることができました。図書館に通い詰めて知識を広げた少年時代、戦争の理不尽さを問い続けた青春時代に、そして新聞記者として宗教や学問の世界に出会った日々。そこから「日本とはどのような国なのか」「日本人とはどのような人なのか」を問い続けた司馬の姿勢は、今を生きる私たちにとっても心に響くものでした。

また、近年の若者の読解力低下への懸念や、経済と文化がともに支え合うべきだという司馬の考えも紹介されました。「もし今、司馬遼太郎がこの時代を見ていたら、どのような言葉を残しただろうか」と思わず考えさせられる、印象深い講演となりました。



司馬遼太郎記念館

続いて行われた総会では、報告や審議事項について活発な意見交換がなされました。率直な意見が多く出され、学会の今後のあり方を考える大切な機会となりました。学会がよりよい形へと発展していくことを願う気持ちで、会場全体にあふれていました。

懇親会は、場所をホテルアウイーナ大阪に移して行われました。久しぶりにテーブルごとに着席しての形で、ゆっくり食事もしましたが、

たと思います。茨城大学の鈴木一史先生の司会で、歓談・会食の合間に、当日の発表者一人一人から、発表の感想が話されました。会場から、大会の運営に当たった先生方、学生の皆さんの紹介、来年度大会予定の南九州大学の紹介も、大学の田中利砂子先生からあり、盛会のうちに閉会しました。

二日目は、提供された資料を携え、文学史跡や資料館を巡りました。司馬遼太郎記念館では、吹き抜けの空間にそびえる約二万冊の蔵書に圧倒されました。読書家であった司馬の姿を身近に感じられる展示であり、書斎を臨む庭園に立つと「ここで庭を眺めながら思索にふけていたのだろうか」と想像が膨らみました。東大阪図書館には自筆原稿も展示されており、作品の息づかいを直接感じることができました。講演で聞いたエピソードと実際の展示が結びつき、司馬文学の世界を一層鮮やかに体感できたひとときでした。

今回の全国大会も、研究発表を通して刺激を受け合い、懇親の中で親しみを深められ

る、充実した二日間となりました。年に一度、全国から仲間が集まり、互いの研究を研鑽し合うこの機会のありがたさを改めて感じます。来年は南九州大学での開催が予定されています。次の再会を楽しみにしつつ、今日からまた研究と実践に力を注いでいきたいと思っています。

(いとう・かずしげ／元豊田高専)
(やまもと・みき／埼玉県蕨市教育委員会)